

論文審査の要旨

報告番号	乙 第 3121 号	氏名	小沢 慶彰
論文審査担当者	主査 吉田 仁 教授 副査 横山 登 教授 副査 武井 秀史 教授		
(論文審査の要旨)			
<p>大腸癌に対する腹腔鏡下手術では、腫瘍の局在位置を視認することは難しい。従来より視認法として墨汁を使用した術前点墨法が施行されてきたが、視認率は悪く、特に腹膜翻転部以下の直腸癌では極めて困難であった。小沢らは、この視認性を向上させる目的で PINPOINT®における ICG 蛍光法による近赤外線を用いた視認法を直腸癌に対し施行し、視認性の向上を確認した。</p> <p>ICG 蛍光モードの視認性の中央値は、点墨の中央値に比べ有意に視認性が高かった。色素法としての墨は、局注する部位・深さや腸管壁・脂肪の厚みにより、墨を視認することが困難な場合がある一方、蛍光法としての ICG は、赤外線にて血漿タンパクと結合した ICG を蛍光色として視認するため、これらの影響をうけることが少なく視認できると考えられた。また、腸管外側から触知できないような早期病変に対しても識別可能であり、且つ腸管壁の伸展に影響されない自然な形で十分な margin を確保しての切離が可能であった。さらにリアルタイムな腹腔鏡手術の遂行が可能であることから、次世代の大腸癌術前マーキング法として腹膜翻転部以下の直腸病変について、術中内視鏡に変わる方法として期待できる事が確認された。ICG の濃度や局注量、局注時期については今後、さらに症例を重ね検討も行っていく必要があるが、ICG 蛍光は腫瘍部位特定だけでなく、吻合部血流の評価やリンパ流の確認といった適応拡大についても、今後の研究が望まれるマーキング法であることが結論づけられた。</p> <p>以上より、本論文は新しい知見を得ており、学術上価値のあるものと考えられ、学位論文に値するものと審査員一同判断した。</p> <p>論文題名：腹腔鏡下直腸癌手術における肛門側切離部位決定のための術前マーキング法の検討 ～点墨法と ICG 蛍光法の比較～</p> <p>掲載雑誌名：昭和学会雑誌 第 80 巻 第 1 号 (2020 年)</p>			

(主査が記載、500 字以内)